

RODAK COLOR CONTROL CHARTS  
LICENSED PRODUCT  
© The Munsell Color Services Laboratory, 2000



13  
1456  
3



明 13  
號 456  
卷 3

圃老蒼說苑道園第三卷

紀復并幽靈の畫圖子名吳言を得る事

法和帝の貞觀年中大納言伴善男竊小應天門小放火  
其罪を尤大臣源信公小負以責あつてきて善男ハ伊豆  
の國流さる紀豊城ハ善男ハ從者するを以て同く古仇  
乃國幸流小處せらるる善男ハ兄紀復并と云ふ者  
縁在せられて俱流る凡法律所謂首從乃罪必  
差降あり其并これ從の兄亦縁在せらるる今善男  
と同く幸流配せる何ぞ其別あやと時の人歎是  
るいふるまり文并性温和りて難あり才思あり取和  
乃初隸書をよくするを以て先帝の附文書めされ



道園卷三

小野公室このりは随したがて筆法ひつぽうを受うけ又百瀬川ももせがわ成なりつゝの畫えを  
巧たくみく及書画しやうゑ精細せいさいたるを以もつて珍重ちんじゆうせしむ身み乃今  
かゝる禍わざはひにあひてこゝに西海さいかいは赴おもむきつゝを改あらためし  
めりあさ生別なまわかの嘆なげき書乃相なまのあひもあつるがきまぐ悲かな位  
やらぐとすむ能あたるもさるまゝの涙なみだのこりて  
見才けんさいの使つかは随したがて境さかに出いでたゆり  
を經へて去位そゐの園のぞも思おもはるべきにあやし此草堂このくさどうは後のちを  
世よに盛衰せいさいを感かんず歎なげけ才さいを疎そに懐なつてこゝに  
海うみは候まちて然しかるの使つかはせんとの復井ふくゐの才さいは  
て又思おもひをすむむさばを疎そに懐なつて又及井またいの才さいは弱よりて  
氣きちの才さいを識しり見才けんさい因よ意いあつるがたに唐たうを隔へて任まかす

芥川かいけん自山澤よこやまより茶草ちそうをとめて合あつて民たみは病やま苦くを  
あるの豪家ごうかの大おほめは屏障びやうぢやうは書画しやうゑを筆ひつしてその精細せいさい  
たるを驚おどろかすはあつて吏民しゐんは庭ていあは仕つかして  
米穀まいこく玩好わんこうの物を多く贈くわるとも且暮または後のちの  
を思おもはるめを餘あまりなくしてさうし受うけ遠首えんすう菱帯りやうたいして  
貝かいを古ふる山海さんかいの幣はひひ致いたす目めはれぬさるを人の友ともとして  
さるはうらまは山鳥さんちゆうは尾上おしの上を隔へて致いたす妻つま乃心こころは  
あつるとまはれ雛子ひなこよつけ好山このやま乃麻のあよつけてさう  
まはつてみるはていづつを思おもはるもさるがきまぐ悲かな  
れども死列しりつより悲かなの生列なまわかはあつてあつと  
よ思おもひを思おもはるのこゝの憂うれは荷かひを思おもはる

あきき事小おひくが、ある夕(豊城)例乃後(彦見)乃  
庵よまき多(丹眼)よ後(を)うかめて、及井(を)えん(る)及井(を)乃  
面(を)常(を)わ(る)る(る)を(を)新(か)る(る)強(勇)何(乃)怒(武)あ(乃)と  
う(ち)あ(り)て(仔細)を(と)く(を)城(陸)に(夜)よ(後)を(掛)ひ(今)日  
室(津)の(日)ら(ま)ち(か)く(朝)に(綱)よ(ま)あ(ら)ま(て)改(さ)已(が)款(を)  
志(き)友(の)主(命)も(て)世(國)よ(ま)あ(り)る(る)小(あ)ひ(ひ)り(て)  
何(ら)ま(き)ま(た)此(消)息(支)付(る)ま(る)見(此)日(後)か(り)く(只)ひ  
あ(小)阿(嫂)い(志)此(丹)を(わ)ら(ま)さ(せ)小(養)ち(く)あ(り)あ(ひ)り  
と(く)く(に)承(王)い(と)泣(く)語(り)れ(は)友(井)い(ま)よ(む)祇(漢)  
目(も)く(れ)く(ま)も(え)く(る)悲(泣)せ(る)王(を)城(の)あ(や)う(か)る  
此(款)を(え)ん(事)の(苦)く(さ)に(か)く(中)出(ま)い(と)い(ひ)ひ

つ(ま)こ(と)る(る)見(日)以(物)子(し)あ(小)由(今)者(定)離(乃)理(も)  
コ(さ)ま(あ)ひ(て)ん(さ)の(こ)や(い)ま(お)ひ(く)も(今)ま(て)い(悔)ゆる  
と(い)ハ(其)井(も)後(う)ち(掛)ひ(生)て(の)別(を)天(外)よ(尋)とも  
蜀(山)の(ま)ま(遠)隔(里)次(て)悲(を)地(下)よ(来)とも(朝)陵(乃)  
水(轉)咽(わ)ひ(ち)あ(さ)理(を)在(周)か(出)う(ち)あ(る)せ(り)よ  
あ(ら)ふ(魚)れ(とも)コ(ら)あ(れ)よ(房)か(る)ま(て)い(さ)く(ま)ひ  
け(さ)れ(で)悲(く)ゆ(る)と(ま)あ(か)る(後)乃(庵)よ(ま)り(れ)  
世(此)い(ま)ま(う)け(の)檀(よ)向(ひ)い(燃)を(さ)け(香)を(接)や(か)て  
靈(膚)よ(規)の(名)を(写)し(供)養(す)る(祥)よ(ま)を(傳)も(す)に  
ん(安)葬(紫)の(戸)引(あ)り(改)め(ま)よ(り)其(及)井(の)風(よ)起(て  
く(く)開(飯)を(汲)花(を)お(て)返(賑)供(出)告(の)外(他)事(ち)あ(り

覺道園卷三

とるまある夜焼下小法善経を書写す一寂寥と  
て死するまはるま屋風の陰より女は面せるあり怪  
名れは妻は楓あり集井筆を投しあつくりや妻の  
楓よりあはれり衣を忘ふる亡霊乃海山を越てこ  
まて墓をひもふ正しくそのまをかりあといふは  
風を押しききまのづる波めをぬれ神はたまはれ  
けをむきしどくもとますかまはるまの波をさか  
生て甲斐なく劫はかてぬ死魂よまかりてまの事  
らぬさよとの妻は死すまの事無縁を拂ひ女乃の  
生て子星の海をさぐるまの事なごう死てまのり  
まの事なごひまの事なごひまの事なごひまの事なごひ

らせんあまごまはるまはあつくりあまはるまは  
ためまあはるまあはるまはあつくりあまはるまは  
せまあはるまあはるまはあつくりあまはるまは  
と契し小今さるまはるまはあつくりあまはるまは  
小亡魂さるまはるまはあつくりあまはるまは  
小枕席をすめ終夜むつと語まはるまはあつくり  
定より香煙れ風は吹きて横きまはるまはあつくり  
すまはるまはるまはあつくりあまはるまは  
乃来とまはるまはあつくりあまはるまは  
て顔色憔悴し氣力さるまはあつくりあまはるまは  
近隣のものも亡妻れまはるまはあつくりあまはるまは

名はるまはるまはあつくりあまはるまは



舟中雨景



背負大物

てい病ともふりあんとさうくは深きとも文小うきたる  
きりく  
さきいへんさうりく王を城を廻してあき何んちやく交  
井々敷を家不よ燕後出る多あ王怪と破子まをひ  
てやへ其井うあしてあき妻々をへ送りあきりてを  
あやしきあふこころにたして悪言はるるああ王を城の中  
大子怪之事れやうや何んかまを夜明けし其井う庵に  
つる王父いっつこころに掃人のさうりあきどあき強してあき  
交井も何れねいかくせしう敷の外まをさき苦をとも  
小擔ぐりあ井中ふまはりくあつともく甲かあま  
志りくれ中を借よを城大子あき金変化乃不為ふ  
王とえんとせしう今日大怪のため子曾還せしう

見此那さいありん知るのよ変化をさうりあきとさきあ  
解よもてあき何雙の美をきて真をくあきあひつさきさ  
いふ事もゆんともいふうら満んどてあき楓いそ夜あきよ  
たやく事さるる其井よ向ひ候をうかあかあきあきあき  
とやつるふとやくもを城あふがらまのひりり妻うまのま  
もくせあかきらまありあき恨さる風信よ外よままあきて  
こあきよあきりしつるあきあかあきあきあきあきあき  
他人よあきまあきあきあきあきあきあきあきあきあき  
よるまもあきあきあきあきあきあきあきあきあきあき  
あきあきあきあきあきあきあきあきあきあきあきあき  
あきのあきあきあきあきあきあきあきあきあきあきあき

雲霧の硯水もやぐもまほなり此のあを筆にさくさくしめ  
 しくまき城いも月より望すぬ一葉て羽意に細をひき  
 捲け牖より志のひま小遠入相う後まきから細をざんふと  
 折うけまは一夢喚んで死あがるを城ひきききめて動せぬ  
 友井のあききこいふするをゆく周章に迫隣の人々戸  
 を放て机へしおぬ一仕果あひしやと物をとんど  
 すくこよらしてみまは相う姿忽し毛脱したる右程と  
 あり細よ度りき眼光するごとく駈遣て人を劫にき城  
 力をききめり細をしめ果を以て搏殺に人々を城が  
 旅丹力乃務くを多きく復井の忙然として夏は光  
 くるごとく美座を合んでき城は向ひしれ亡き妻は慈傷

よ林心曾送一老狸のため小ちうさくさるは思魚乃とて  
 と落日此夏思をひききき城う平生世を怪漢なを疏  
 かしがけ舟振舞よの城は結る事を感念しこれの城は既  
 を檢もする見ある一之母怪事を引よせし水鄙ゆる  
 かこぬるを兄放小のうあ河嫂乃夏思ひあまのまを  
 する小志のびははかすありまひぬきあまのう却て思ひあ  
 きしめあふ事とわくちんと日外空言て中つる小日記し  
 まるりて此悲歎よとてさよひひごとくやまぬ内言ん  
 哀慕乃あまの林心方たるをつけらみては老狸松を  
 ぶけりうとほめて罪を告て謝せぬ其丹まぶ放の妻の  
 甘き事を収ひしむ妻は執事とてを愧れはき城も女



城一近隣乃くも其井うつろ一たる幽魂乃其目あり  
く小たたるを称讚してやかり推して人より人よりて  
ま墨痕鮮麗りて奇巧あるをめでるを其位乃  
守あり人のよ入任をて其のほ至帝れ敵見一後へ  
りれ其井う畫乃巧あるを再ひ感めひ其城の勇猛れ  
旅を稱しめひ後ある故かすれはまなる徳の勢息は  
印け天にれ悦ひきりなる善乃机も良人の芳志れ  
くくもあつた其井う向ひ突小之視とありても志し  
まいつてまよおろくも生て故に侍りつるを其の程も  
をりていふひなる侍るおど且後且笑好舞劇の序  
めりてちりてむつと其間まよまよりてはるるを其

於鄙の貴族其井う幽其乃畫とて賞欲わきり  
保幼を投しておんるを争小画事教子授りてれ  
がふ小男れ價貴りりしやあん  
和氣清麻呂河伯小巫を投して侍  
孝謙帝再ひ位を踐ふ皇祚を以て稱述天白  
と稱し其天平神護元年の冬予削及鏡大政大臣禪師  
乃位を授西宮小おしめ多ひ帝氣寵愛り多事甚  
一其大宰府の河曾麻呂をよその道鏡を威控小  
阿諛して宇佐北おん神の純宣と稱し帝位小即し  
めあつて天下泰平あんとすむ道鏡唱悦して院宣を  
美其天白皇曰帝位れ事い私ありはれ勅使を遣して

神院小任せり決せんやとて和氣清麻呂をりて宇佐小  
遣一多清麻呂勅を蒙りて宇佐小参詣一廣小  
依て事此由を奏し一是の國之象此大事あり一の不思後を  
示し一多と祈念し一多れは天神勿忘麻呂を切しき多ひ長  
三丈ばかり小丸形を現し多ひ教向あり清麻呂伏特して  
仰ぐえふと申すは天神院して曰我國の天嗣は神代より  
大く皇胤の外臣として傾心奉る小あはれ況や廿道乃  
者をや母飯王に於て一と神院宣小清麻呂肝子  
賜して都小飯王参内は及鏡おん前よ侍て椅子より  
清麻呂を呼りけいふと問ふ清麻呂少も諂はれあり此ま  
小奏聞は天皇を流河にめちみわする法臣も志ほり

言羞て之る小及流大小怒て眼小血をそき大息ついで  
清一良を睨むのま神院を泣きてや流ちるべし一希代の  
くせよのあ皇死罪小處は一一と牙をかんで罵罵りく侍  
天皇死罪をちるあせよひめまてまたく怒よとてかみ  
清一良は是れ筋をくせよを穢麻呂と叫ぶ大隅の國  
一流は時乃人清麻呂正並忠の郎あるを稱し歎息せざる  
はなり一後永百川にわたつて風流得意此交あり多れは清  
麻呂をさすけて教の外まておく侍百川清一良よりら向  
君摺清ともかれば一何ぞ世世とも小濁ても流は随ひ  
ま彼を揚さるやと小清一良を完示し一と道を枉て人  
よ事い何ぞかあはれ一も父母の邦を去んや及鏡神院を

詐つたて王位わうゐつつかんとは僕わがもまうと神かみ代しろを詐つたて死し地ぢよつうんと  
 に幸あはれふまぬかたて放はなまうり堂どうふ百もも門かど堂どうをうめて信しん實じつ  
 か忠ちゆう節せつ此こゝ良りやう計けいを感かんて依よ後ご此こゝ國くに乃のち私し領りやうを分わけて配はい西せい此こゝ  
 技ぎとせん約やくしむ小こ社しゃを志しまうて別わかれをふせはふまき  
 言こと率すゑ等らうも哀あはれまやこらんしつて皇すう弟ていて行ゆ程りやう小こ文ぶん隅ぐ此こゝ  
 りも到いたりり彼か國くにの桑くわ原げん此こゝ父ちち老らう稻い積せきとてふもあま  
 ふまきとも信しん之のち信しん之のち郎らう小こしてこふまきを博あひ之のちやうて途みち  
 ておのまか家か小こつとるひつまかつとてそそそ父ちち此こゝとて  
 信しん之のち且かつ夕ゆふ之のち依よのおほん神かみをわらまきはははらうとて  
 と小こ念ねんて歩あゆみ此こゝとてありうと皇すう目めふれぬ鄙ひ此こゝ住すひ  
 小こふりく此こゝ此こゝありりすまきかて且かつ小この信しん之のちよとて部べ

を思おもひ夕ゆふの澤さわ畔はたよ行い吟ぎんして教しやう色しき惟ただ悴せし般はん容よう括くつ  
 槁かう以もつ稻い積せき之のちを名なめよまのひに君きみ瑾ぎんを懐なつき諭よを振ふるて  
 小こ玉たま五ご多たふも財ざい運うん此こゝ志しかてとておほなりとて小この  
 小こまへは信しん之のち世よ世よ塵ちん埃あいを家かにまふ小この本ほん意いかふるへ  
 小このあや  
 小このあや家か小このあや月つき此こゝ皓こうくもる小このあやをてしあひやがて  
 のちつづつと教しやう乃のちをやけき信しん之のち依よありて花はな信しん之のち小このあやせあふ  
 事こといんふあふと慰なぐさむ小この信しん之のち信しん之のち一いつの村むら氣きを志しまきかて  
 う世よあふ此こゝ村むら小このあやを称なづけし典てん衣い此こゝをるうとてうり  
 うらこまきまはく梅うめ雨あめうらつてき旬しゆんを經へてやまきうりま  
 稻い積せき之のちを仰あやし歎なげむ及およ信しん之のち信しん之のち稻い積せきか小このあやをてて  
 由よしをとも小この稻い積せきうらつて信しん之のち信しん之のち此こゝ國くに此こゝのあやせよとてあふく

夏少き河伯系と申事此傳至て其貌少女を教つ乃  
鏡を以て鏡もよあまを河伯の娶と稱し中津川乃淵子  
沈み系祀さるるおちのり洪水来て人民を漂溺す中津川  
至中津民を集へ公差豪長者河上小會して巫女を請  
系以て費許多りて民負しく娘もるものい恐て他  
子走れしおちのり信を信うらまはさるる國の水利よ治りか  
かあり國人愿ひ愚衆ありてい系祀を祈り今い不正  
有りて利欲のよ小是をあらはす皆公差長老巫女神  
宜多し罪ありし其害を除くす易かりきとも承今大  
河に事小よりて小事な官屬父老等あて月日  
るもくとも是後志おちのり承教伝して民の愚をか

小兒のい不忠ありより良計此傳んそ系祀目を承  
し告よくし小物後議して目をあうらむとやみ是  
降つてきは衆民さるる教をくら証をあげし國中  
小告さるる物後それよりや告を告を信り信り信り  
したるも後物後小をわくめ日おちのりを信りす  
ももあまを信り信り信り信り信り信り信り信り  
後子及を信り信り信り信り信り信り信り信り信り  
を神理公差中央よ後よけ水上小のぞんで坐を志す  
豪長者圃老等友をよつてある巫とてるい老女より  
小信軍衣を志して身子此巫女十人をもり至る後小信河伯  
乃婦と定する少女よ後夜をよめいせ竹葉よ系て後

民小<sup>みこ</sup>卑<sup>ひ</sup>せ吏<sup>し</sup>卒<sup>そ</sup>等<sup>ら</sup>大勢<sup>たいせい</sup>をさめて山岸<sup>やまがし</sup>小<sup>こ</sup>すむ移<sup>うつ</sup>移<sup>うつ</sup>公<sup>こう</sup>  
 美<sup>み</sup>のあへはつして帝<sup>みかど</sup>此<sup>こゝ</sup>あはせしゆで和氣<sup>わき</sup>信<sup>のぶ</sup>丁<sup>てい</sup>名<sup>な</sup>乃<sup>の</sup>公<sup>こう</sup>  
 ころりあへ王<sup>わう</sup>比<sup>ひ</sup>比<sup>ひ</sup>小<sup>こ</sup>休<sup>やす</sup>てたりしゆあへとらふかよふこと  
 公<sup>こう</sup>差<sup>さ</sup>をりめあへちかふもの光<sup>ひかり</sup>狼<sup>ろう</sup>狽<sup>たい</sup>して地<sup>ち</sup>は竹<sup>たけ</sup>以<sup>も</sup>清<sup>きよ</sup>名<sup>な</sup>  
 餘<sup>あま</sup>くとして飯<sup>いひ</sup>屋<sup>や</sup>小<sup>こ</sup>の白<sup>しろ</sup>王<sup>わう</sup>顔<sup>かほ</sup>色<sup>いろ</sup>正<sup>ただ</sup>して曰<sup>いは</sup>官<sup>くわん</sup>屬<sup>じやく</sup>此<sup>こゝ</sup>めく  
 謹<sup>まこと</sup>でうけしぬるは當<sup>あた</sup>國<sup>くに</sup>乃<sup>の</sup>河<sup>か</sup>伯<sup>はく</sup>此<sup>こゝ</sup>系<sup>けい</sup>祀<sup>まつり</sup>近<sup>ちか</sup>奉<sup>ほう</sup>みづらり  
 官<sup>くわん</sup>人<sup>にん</sup>長<sup>ちやう</sup>老<sup>らう</sup>小<sup>こ</sup>私<sup>し</sup>の利<sup>り</sup>欲<sup>よく</sup>小<sup>こ</sup>費<sup>ひ</sup>多<sup>た</sup>く系<sup>けい</sup>事<sup>じ</sup>をわらふ  
 して醜<sup>みにく</sup>婦<sup>ふ</sup>を以<sup>も</sup>て河<sup>か</sup>伯<sup>はく</sup>小<sup>こ</sup>送<sup>おく</sup>るゆへ河<sup>か</sup>伯<sup>はく</sup>づらうと怒<sup>いか</sup>ま上<sup>うへ</sup>  
 帝<sup>みかど</sup>小<sup>こ</sup>歎<sup>なげ</sup>訴<sup>う</sup>よらる王<sup>わう</sup>帝<sup>みかど</sup>憐<sup>あはれ</sup>みし系<sup>けい</sup>事<sup>じ</sup>此<sup>こゝ</sup>やうにして  
 まんまんとしるも勅<sup>しやく</sup>を下<sup>くだ</sup>しめ小<sup>こ</sup>利<sup>り</sup>やうと皇<sup>わう</sup>命<sup>めい</sup>を  
 系<sup>けい</sup>王<sup>わう</sup>まんとし遠<sup>とほ</sup>流<sup>りゅう</sup>と極<sup>ごく</sup>事<sup>じ</sup>ありて今日<sup>けふ</sup>日<sup>ひ</sup>系<sup>けい</sup>祀<sup>まつり</sup>小<sup>こ</sup>のまみ

ころりて河<sup>か</sup>伯<sup>はく</sup>此<sup>こゝ</sup>婦<sup>ふ</sup>をえせよやといふも公<sup>こう</sup>差<sup>さ</sup>も吏<sup>し</sup>卒<sup>そ</sup>も色<sup>いろ</sup>を  
 失<sup>うしな</sup>ひおとらき怒<sup>いか</sup>る中<sup>なか</sup>小<sup>こ</sup>長<sup>ちやう</sup>老<sup>らう</sup>とお侮<sup>あは</sup>れまおづと遠<sup>とほ</sup>出<sup>で</sup>りやう  
 姓<sup>せい</sup>古<sup>こ</sup>河<sup>か</sup>伯<sup>はく</sup>此<sup>こゝ</sup>婦<sup>ふ</sup>を求めゆと殺<sup>ころ</sup>殺<sup>ころ</sup>了<sup>り</sup>を以<sup>も</sup>て求めつれは國中<sup>くに</sup>を  
 小<sup>こ</sup>あよ及び<sup>およ</sup>比<sup>ひ</sup>比<sup>ひ</sup>小<sup>こ</sup>をさかへて系<sup>けい</sup>事<sup>じ</sup>をえしと求めしゆ遠<sup>とほ</sup>流<sup>りゅう</sup>の  
 系<sup>けい</sup>事<sup>じ</sup>此<sup>こゝ</sup>報<sup>ほう</sup>費<sup>ひ</sup>多<sup>た</sup>く巫<sup>ま</sup>女<sup>によ</sup>此<sup>こゝ</sup>謝<sup>しや</sup>をきくしゆまを婦<sup>ふ</sup>乃<sup>の</sup>  
 價<sup>あひ</sup>ものつと減<sup>げん</sup>し他<sup>た</sup>國<sup>くに</sup>を求<sup>もと</sup>る事<sup>こと</sup>をやめ國中<sup>くに</sup>此<sup>こゝ</sup>内<sup>うち</sup>事<sup>こと</sup>  
 ちりりたるものを集<sup>つひ</sup>大<sup>たい</sup>巫<sup>ま</sup>姫<sup>ひめ</sup>此<sup>こゝ</sup>國<sup>くに</sup>さへまわせし人<sup>ひと</sup>殺<sup>ころ</sup>  
 も少<sup>すく</sup>く巫<sup>ま</sup>女<sup>によ</sup>稀<sup>まれ</sup>もたれしゆありゆり以後<sup>いご</sup>ハ姓<sup>せい</sup>古<sup>こ</sup>此<sup>こゝ</sup>と  
 近<sup>ちか</sup>國<sup>くに</sup>をさあふらる皇<sup>わう</sup>命<sup>めい</sup>め巫<sup>ま</sup>女<sup>によ</sup>を以<sup>も</sup>て系<sup>けい</sup>事<sup>じ</sup>を行<sup>い</sup>ひ侍<sup>し</sup>ら  
 け度<sup>た</sup>はわらるるゆへと戦<sup>いくさ</sup>くまふしあまは清<sup>きよ</sup>名<sup>な</sup>は  
 怒<sup>いか</sup>て何<sup>なに</sup>ぞ私<sup>し</sup>を以<sup>も</sup>てしををゆるさんゆへ是<sup>こゝ</sup>を由<sup>よし</sup>ふはぬ



新編 源氏物語 卷三

十一

河伯此怒小舟きて人民を漂溺せん此少婦醜一泣之也  
 かたはれて其痛を求めてあらんけり河伯小舟のりて中  
 来り此別使の大巫姫を身せん稻積のそとを稻積やが  
 大巫姫を拘て河中小投流あはやくする内七顛八倒して  
 水底よ沈むやありて流るる日何ぞかまをせざる大巫女  
 先て乃ち身流るる弟子を道を越稻積のそとを籾かつて  
 拘上弟子巫女三人を投流巫女小舟へ沈つたあはたけ  
 ると泣きけひあはるる漂流して身をまかきつるる  
 めをらるひて底よ沈頃更りて流るる身をまかきつるる  
 女子何ぞ事を使せざる里老れ内を遣さん稻積のそと  
 の長老れりけて強欲不正あるを稻積かたはれて流るる

舊化とくづるが級純とくく突居にあはさけびて絶例と  
 小岩を解て瓦頂を傷り血染るる流るる集ひたる  
 去氏小戦標事かぎりか一泣之也岸上示きて水面に臨  
 使乃改るるを此事ひきく一泣之也いそくこれ勅  
 を言及て今河伯の河伯ふんを後てかきとをせざる  
 河伯のまを却より海をみるるや吾やけ度か公差を頼む  
 といふと使卒よ命すはは公差使卒告叩頭して血を  
 流流流るる水上よ向ひいふ河伯く一泣之也我日本此天  
 地よ何んもの帝の勅をとりし使卒を求めて之をさる  
 やうやいある唯爾神あは今水底よ投したるものを何  
 を生してかたはる何ぞ彼流をあげてつらまよは宗はる

と言を捨て罵少水面おぼやふて風もあく細る  
波もかへ信之を顧てこまされ水底小河伯かへ今よりい  
系祀永くあまが此皆公羨長老木利欲のため巫女  
小くけり人民をすまひせしあまを罪安かへ此と不  
小皆魂を天介よたれ一此中不埋入んをかを伏削し  
生るる面をれよのたまふりる皇信之信せ先示し  
家思ふ仔細あまは一統死刑をゆるし罪を此科ま  
敷下此講をほし以庵し之稻稔を促し家小か皇  
まより民を及て渠を鑿河水を引て民回小灌きき  
いししく水利を以て國中洪水此患あし又系祀乃  
ため民を責てひきはりる教り此法をとるあけ

皆鉏鉤田器小かして貧民よ與へて曲辰を勸めり  
民人土を安んじて業をこれし國中足富こり  
おおて信之皇芳夜隣國小かやき教小もきつて百  
川よりめ吉備美備原良継小村登ひるる相りし  
時小先帝器一多し公壁王沙代を志りしあま  
亀元奉れり下め及境い下野の國は流し業脚を  
別あり信之信を教小飯しあま彼國此民小父母を失ひ  
しるるく嘆き志し少長とをく路よあら信之信  
稻稔をるるを促し列をふし船小を以乃帆を十分  
小あがて花洛小瑞小再以瑞の神をひるるしりて内小  
帝あまし此賞賜をわづけりあま信之信澤で編割



の罪より依<sup>ツ</sup>帝<sup>ヲ</sup> 恭<sup>ク</sup> 敬<sup>ク</sup> うるべし<sup>キ</sup> 外<sup>ニ</sup> 邦<sup>ノ</sup> 神<sup>ノ</sup> の 事<sup>ヲ</sup> 紀<sup>ス</sup>  
を<sup>シ</sup> る<sup>ル</sup> 河<sup>ノ</sup> を<sup>シ</sup> 治<sup>ス</sup> る<sup>ル</sup> を<sup>シ</sup> 賢<sup>ク</sup> と<sup>シ</sup> 官<sup>ニ</sup> 任<sup>ス</sup> 前<sup>ニ</sup> 年<sup>ノ</sup> 小<sup>ノ</sup>  
超<sup>ス</sup> 永<sup>ク</sup> 寵<sup>ヲ</sup> 恩<sup>ヲ</sup> を<sup>シ</sup> 加<sup>フ</sup> る<sup>ル</sup> として<sup>シ</sup> つ<sup>ク</sup> 之<sup>ヲ</sup> た<sup>ス</sup> ま<sup>フ</sup> け<sup>レ</sup> じ<sup>キ</sup> 少<sup>シ</sup> 事<sup>ヲ</sup>  
の<sup>ノ</sup> 乃<sup>チ</sup> 卿<sup>ト</sup> たり<sup>シ</sup> め<sup>テ</sup> 朝<sup>ヲ</sup> 家<sup>ニ</sup> 此<sup>ノ</sup> め<sup>テ</sup> 小<sup>ノ</sup> 神<sup>ノ</sup> 祀<sup>ヲ</sup> を<sup>シ</sup> 加<sup>フ</sup> る<sup>ル</sup> 王<sup>ノ</sup> 後<sup>ニ</sup> 小<sup>ノ</sup> 王<sup>ノ</sup> 命<sup>ヲ</sup>  
を<sup>シ</sup> 加<sup>フ</sup> る<sup>ル</sup> として<sup>シ</sup> 愚<sup>ク</sup> 民<sup>ノ</sup> の<sup>ノ</sup> 迷<sup>ヒ</sup> び<sup>ト</sup> 死<sup>ス</sup> る<sup>ル</sup> 事<sup>ヲ</sup> 皆<sup>ク</sup> 知<sup>ル</sup> べ<sup>シ</sup> 也<sup>ナリ</sup>  
から<sup>シ</sup> する<sup>ル</sup> 禮<sup>ヲ</sup> 略<sup>ス</sup> あり<sup>キ</sup> 也<sup>ナリ</sup>

圃老巷說世免道園卷三終



